Reminiscences of my life in the field of leprosy (1)

Yoshikazu Yajima

(Honorary-Director General, National Leprosarium Tama Zensho-En, Tokyo, Japan)

らいと私 (1)

——栗生楽泉園開園，初代医官を第一歩として——

矢 嶋 良 一

日本らい学会名誉会員 国立療養所多磨全生園名誉園長

編集子：矢嶋先生，お休みのところをお邪魔し恐縮です。先生の長年にわたるらいの医療活動の経験のお話を承りたいと思いますが，多磨全生園に来られる前の，草津の御体験からお話下さいませんかでしょうか。

矢嶋：そうですね，とりとめのない話になるかも知れないけれど，日本らい学会雑誌の編集をやっているあなた方からお話があっていろいろ思案している中で，一つだけどうしても話をしておきたいことのあることに気づいたんですよ。それは，メリー・ヘレナ・コンウォール・リー女史のことです。熊本回春病院とハンナ・リデル嬢（英国伝導会社）については，嬢が社交家であったことも

あり，いろいろと記録が残っています。しかしですね，コンウォール・リー女史についてはあまり知られていませんから，まず，彼女を偲んでみたいと思います。

コンウォール・リー女史の救らい事業

英国貴族の一人娘として成人したリー女史が日本を訪れ，偶々路傍に跪く病者に心を惹かれ，その感銘を永く忘れることなく，生涯と全財産を草津温泉湯之沢らい患者の母として，救護並びにキリスト教伝導に捧げつくしたということ，このことは私の生涯をらい関係に結びつけた，ある意味では，一つの大きな要因であり，若かった私に大きな感動を与えてくれました。

古来，草津温泉は，天下の霊泉として各種皮膚病患者の療養に利用されていましたが，らい患者のこれに浴する者数多く，明治末期から大正の初期にかけては，814名が草津湯之沢部落をつくり療養していました。当時は病気が非常に難治であったために，自暴自棄に陥り，賭博飲酒を常とする者が多く，全く手のつかない秩序紊乱の巷を呈していたとのことです。

大正4年，草津湯之沢に，リー女史は忽然として現われ，聖書を片手に神の教えを説き，さらに生活困窮者のために独身男子ホーム，女子ホーム，夫婦ホームを建設，無料で収容救護し始めました。当時58歳であったと聞いています。そして，女史の庇護を受ける者が250名を越すに至りました。

私が女史の生活を目の当りにし，医者いや医者

コンウォール・リー女史

女史の筆蹟（申命記三三の二七前半）

の卵として、「らいは伝染病ですから、患者にさわった後は、手を洗ってはとうですか」と言ったことがあります。その時、女史は、「感染したら本望です」と笑って答えられました。私はこの方よりどれだけ大きな感化を受けたか計り知れません。

聖ハルナバ医院（画はがき複写）

リー女史は、さらに、部落民のために、聖バルナバ医院を、未感染児童のために聖マーガレット館を開設し、医療並びに保育事業もなされました。

草津の人々はリー女史を「かあさま」と愛称し敬慕していましたが、昭和16年12月18日、84歳を以って、兵庫県明石において昇天されました。栗生楽泉園に程近くにバルナバ墓地がありますが、そこに、女史の湯灌を受けた多くの物故者と一緒に御遺骨も遺言によっておさめられています。

「高原」記念号に寄せられしリー女史の一文が再録されてある。茲にリー女史の此歳にまで導かれて来たと言う謙遜な信仰を見る事が出来る。宝玉の文字である。

Twenty six years ago I came to this country, a single woman with my nearest and dearest all already in Paradise. "Who are these with you?" you may ask, seeing a goodly company, men women and children, all those St. Barnaba's Church calling me by the beautiful name of "Mother?". With Jacob I answer "The children which God hath graciously given Thy servant."

"More are the children of the desolate than of her which hath an husband." The words of Isaiah

have come true to me as to countless other woman whose call has been to give up the thought of husband, children and home, that they may often themselves for Christ's service in bringing the children of other mothers to His Arms.

And now, as I draw near my seventy seventh birthday and recall the many blessings of my long life I reckon as one of the greatest the travail pains which have turned to joy and thank Him for the dear children. He has given me the "wise children who make me glad."

Whose love and loyalty and care for me are the joy of my old age. Christ's promise has been fulfilled "In this time children a hundred fold." to be with me through "life eternal."

Mary H. Cornwall Legh

徳満唯志訳

想い起せば今から二十六年前、当時私にとっては最も愛しい又最も血縁の近い者はもうみんな逝いてパラダイスに在りましたので、私は単身此の国に渡って参りました。『是等の汝と偕なるものは誰なるや』いと楽しげな一団即ち私を「母」といふ美しい名で呼んで下さる男子達、婦人達、又子供達、其他聖バルナバ教会に属する総ての方々を見てこんな質問をなさる方がいるかも知れません。これに対し私はヤコブと共に『神が僕に授け給いし子なり』と御答へ申上度うございます。『大なきものの子はとつげるものの子より多し』といふイザヤ書の聖書は御召命を畏み、身自らをキリストに献げ、世の母達の子供を主の御腕に抱かるものとせんがために、夫と子女と家庭に就いてののぞみを棄てた数へ難き多くの婦人達に事実となりし如く、この私にも事実となって参りました。近く第七十七回の誕生日を迎へんとするに当り、長い生涯中受けし数々の祝福を回想し、曩の日の産みの苦しみが最も高尚な苦しみの一つであり、それが今は大いなる喜悅となっていることを思い、主が私に与へ給いし愛する子供達——『我を喜ばしむる智慧ある子ら』のために主に心からなる感謝を献げます。子供達が私を愛し忠実を尽しよく世話してくれることは年老いし私の無上の喜びでございます。キリストの御約束は

『永遠の生命』を通して私と偕に在るべき『今の時の百倍の子ら』によってここにも成就せられたのでございます。

メリ・エチ・コンウォール・リー

教会方面で個人の表彰と言ふ事はあまり無い事であるが、昭和十一年の春に米国聖公社の社会局が社会事業功労者に贈呈する最高名誉の功労賞とも謂うべき十字架記章(裏面に名誉者の氏名印刻)をリー女子に贈送し來つた。既に明石に隠退後であったがリー女子は感謝して之を首飾に懸けた。

喜寿祝会当日会衆の一部

編集子：そうしますと、先生がらいに関わった最初の動機はリー女史に巡り会われたことによるのでしょうか。

矢嶋：いや、そうではありません。話の順序が少し前後するのです。

昭和4年の夏に、慶応医学部の学生であった私が、初めて全生病院を訪れ、光田健輔先生のらいに関する講義を聴いたことが最初の動機といえるでしょう。

それでは、その当時の頃を少し振り返ってみましょうか。人間の出会いというものは実に不思議なものです。

リー女史との出会いと栗生楽泉園の設立

全生病院の見学は、医学部衛生学教室の指導であったので、私は関心の一つ々を草間良男教授に報告したところ、先生は大変喜ばれて、「草津町湯之沢部落居住らい患者の衛生統計調査」というテーマを下されたのです。

同調査は、昭和4、5年の夏休みを利用して、草津温泉に滞在し実施しました。患者さんとの接触を重ね、そして、私は、その湯之沢居住らい患者の救済に当っておられた英国貴族、ミス・メリー・ヘレナ・コンウォール・リー (Miss M. H. Cornwall Legh, L. L. A.) 女史の崇高な人格に接することができたのです。

そして、こうした事情が背景となって、栗生楽園設立の動きがなされ、昭和5年の第59議会(国会)において設立予算が成立したのです。当時の内務大臣(現厚生大臣)は衛生大臣のニックネームのあったほどに衛生問題に熱情を持っていた安達謙造氏であったと記憶しています。

翌昭和6年5月から土地買収が開始され、8月15日から建築工事が始まりました。

湯之沢部落略図(陰影は事業所属の建物)

※本稿は、過日、編集子（国立多磨全生園前田光美、国立多磨研究所平田恒彦）が矢嶋良一先生宅へお邪魔し、先生から直接お聞きした内容を記録したものである。

最初、先生に原稿を依頼したところ、眼が不自由になってきているので、原稿を書くのは遠慮したいとおっしゃられた。そこで、先生から直接お話を伺う機会をつくらせていただいた。

先生の御記憶の驚くべきものであることは大変に有名であるが、まさにそのとうりであり、又、語られる内容はきわめて豊富であった。一回や二回の連載では不可能である。そのため、語られた内容を何回かに分

けまとめ、編集子の責任において、シリーズ化して本誌を飾っていただこうと考えている。

先生は、又、御自分の語られる内容を確認の意味において、次のような小冊子を御紹介下さった。

1. 矢嶋良一著、春秋記略—瀬一路—（「多磨」誌及び「高原」誌を飾ったもの）
2. 貫民之介著、コンウォール・リー女史の生涯と偉業、コンウォール・リー伝記刊行会編集刊行、昭和29年12月。

これらの著から、内容の相応しいものを、編集子の責任において、抜粋掲載する予定にしている。